

論文

モンテーニュのいわゆる懐疑論をめぐって

—モンテーニュ研究 2—

藤 江 泰 男

はじめに

モンテーニュの評価について、われわれはすでに、最近ないし今日の哲学者としてはメルロ＝ポンティやヴィエイヤール＝バロン、十七世紀の哲学者としては、パスカルやマルブランシュに定位しつつ論じておいた。それはまだ、モンテーニュ研究全体に基づくものというより、筆者の手近なところ・親しいところから、モンテーニュを仰ぎ見る、という類いの、「研究覚書」的な論述を免れてはいない。しかしながら、ある種演繹的形式で論述できるほどに、十分な時間を許されていない筆者の現状からすると、こうした分散的なアプローチはいわば不可避的でもあるように思う。

今回も、そうした研究ノートのスタイルで、これまでリサーチしてきたモンテーニュ研究の現状、というより、その『エッセー』に関する出版と研究の現況について、われわれの捉え得た限りで、ここに報告しておきたいと思う。さらに、モンテーニュの懐疑論的側面、懐疑主義的側面に絡めて、筆者に見えてきた限りでのモンテーニュ像についても、幾許か述べておきたいと思う。

1. 出版事情をめぐって

さて、これまでわれわれが親しんできた『エッセー』の翻訳、関根秀雄訳（新潮社）、原二郎訳（岩波書店）、荒木昭太郎訳（中央公論新社）^①などは、いずれも共通の了解に基づいて訳されている。というのも、その訳文には、段落の冒頭や文章の途中に、A や B や C などの記号が挿入され^②、執筆時期が一目で分かるように配慮されている。つまり、1580 年の初版〔段

モンテーニュの『エッセー』の引用に関しては、フランス語版については、PUF/Quadrige の一冊に再統合された版（いわゆるヴィレー・ソーニエ版、2004 年）を使用する。邦訳については、基本的に岩波文庫の原二郎訳を使用する（もちろん、本文の展開の必要に応じて、他の訳を使用することもある）。まず邦訳の頁を、セミコロンを挟んで、フランス語版の頁を示す、という順序で引用箇所を提示するつもりである。

① 関根秀雄訳『随想録』（白水社、1962-63 年 / 新潮社、1954-55 年）、原二郎訳『エッセー』（岩波文庫、1965-66 年）、荒木昭太郎訳『エッセー』（世界の名著、1967 年 / 中公クラシックス、2002-03 年）、後者の荒木訳は、3 冊本での出版ではあるが、内容に即して分類されたいわば選集版（抄訳）である。この種のデータについては、ロベール・オーロット著『モンテーニュとエッセー』（白水社、1992 年）の最後に添えられた「参考文献」が詳しい。以上の参照は、筆者の手許にあるものからの確認にすぎない。

階の文章であること]を示す A、1588 年版での追加部分を示す B、1588 年以降、モンテニユが最後まで修正ないし追加しようとしていた文章を示す C、というように、これらの記号は、それぞれの出版ないし執筆年代を示しており、その間の表現や内容の違いによってモンテニユの思想的変化や進展を推測させる、研究者必須の手段にもなっていたものである。ところが、もっとも最近の宮下志朗訳（白水社）^② には、この記号が示されていない。それは宮下氏の判断に基づくものであるとともに、最近のフランスでの『エッセー』出版事情を踏まえた措置でもある。

というのも、手許にある文献で言えば、まずは 2001 年の “la pochethèque” のシリーズでは、1595 年版の『エッセー』を底本にした *Les Essais*（ジャン・セアール版）が出版されたし、さらにガリマール社のプレイヤード版として、同じく ABC の記号による区別を伴わない、つまり 1595 年版に基づく明記した『エッセー』が、2007 年に出版されている。以前のプレイヤード版（1962 年）は、基本的に三段階の執筆年代を区別したものであったので、これで、同じプレイヤード版の中で、異なる立場から編集された二つの『エッセー』が読者に提示された、というわけである。

このように、ボルドー市版の『エッセー』（1906-33 年）からヴィレー・ソーニエ版『エッセー』（P. U. F., 1965/Quadrige, 2004 年）にいたる^③、これまで定番となっていた『エッセー』の校訂版に様変わりが、少なくとも変化がおきかけているようである。こうした動向が、決定的のものであるかどうかは、いまだ専門家足り得ていない筆者の判断できるところではないが、宮下氏は、自身の翻訳の第一分冊の解説部分で、概ね以下のように述べている。

モンテニユの家族は、晩年のミッシェルが『エッセー』の彫琢に精魂を傾けていたことは知悉していた。そして夫の死後、『エッセー』新版を上木する話がまとまり、底本として「ボルドー本」ではなしに「底本 X」〔ボルドー本とは別の底本〕が選ばれた。したがって、「底本 X」こそモンテニユの最終意志であり、その活字化であるグルネー嬢版を近代版の底本とするのは、かなり自然な発想ではないだろうか？ ところが、1595 年版は、編集者の改変が目立つ版という烙印がおされてきたのである^④。

このように、いまだ存在の確定しない版に素朴に基づいていいものかどうか、つまり、これまで散々批判されてきた、意図的改変の可能性を絶えず指摘されてきた版を、このように素朴に信頼していいものかどうか、正直、筆者には判断できない^⑤。これまでの版と併存ない

② 大文字、小文字の違いはあれ、この記号が挿入されている。

③ Cf. モンテニユ『エッセー 1』（白水社、2005 年）。すでに『エッセー 4』（白水社、2010 年）まで出版されている。

④ その間にヴィレー単独の版で、二種の『エッセー』が、1922-23 年、および 1930-31 年、それぞれ 3 巻本で出版されていたことも指摘しておこう。底本はもちろん「ボルドー本」である。

⑤ モンテニユ（宮下志朗訳）『エッセー 1』（白水社、2005 年）p. 323. [括弧] 内の補足は筆者による。

し共存する形での出版は、もちろん歓迎するところであり、さらに言えば、宮下氏の訳文は、モンテーニュの隠れたレトリックまでも映し出すような見事な出来映えであることも確かである。がしかし、そうであればあるだけ、生来思想的変化に関心のいく者からすると、あるいは、モンテーニュの思想的影響関係に興味を持つ読者からすると、何とももったいない邦訳であると思えもする。というのも、ある種の読者層にとっては、他の版を、三段階を区別して表示している他の版を常時参照しながらでないと、宮下氏の類い稀な表現技術を十分には味わえない、のであるから。

いずれにしろ、ここでは、これまでの三種の版、『エッセー』編集のための定番であった三種の素材、三種のテキスト群について整理しておこう。ヴィレー・ソーニエ版の「新版の序」で、編者ソーニエは、主要な四段階 (quatre états) について、概ね以下のように整理している。つまり、

1. 1580 年版 (1582、1587 年版のわずかな異文も含めて) → 1870-73 年 (R. Dezeimeris et H. Barckhausen, Bordeaux) 版〔2 巻本〕の底本。
2. 1588 年版 → 1873-75 年 (H. Motheau et D. Jouaust, Paris) 版〔7 巻本〕の底本。
3. 1595 年版 → 1872-1900 年 (E. Courbet et C. Royer, Paris) 版〔5 巻本〕の底本。
4. 「ボルドー本 (exemplaire de Bordeaux)」、換言すれば、1588 年版に、モンテーニュ自身が追加・修正部分を書き込んだもの、1906-33 年、「ボルドー市版 (édition municipale; Bordeaux, 1906-33)」の底本となる (1912 年、「ボルドー本」の「写真複製版」の出版も)^⑦。

以上が、ソーニエが、新規に整理したところのまとめである。第一段階を示す A、第二段階、1588 年段階での追加を示す B、いわゆるボルドー本、モンテーニュの手持ちの本にぎっしりと書き込まれていた、あるいは挿入されていた文章を指示したものが C、ということで

⑥ こうした判断は、専門家にとっては驚きではない、正確に言うと「専門家の大部分はこの選択の正当性をすでに納得している」(*Les Essais*, Gallimard, [Pléiade], 2007, p. XCIV) との記述が、最近のプレイヤード版の校訂者たちの言葉としてある。これも 1595 年出版の「グルネー嬢版」(その出版社名も追記して「グルネー・ランジュリエ版」とも称している)を底本としている。この間の事情については、もう少し詳しい説明ないしリサーチの必要があるろうが、次回以降の課題としたい。

⑦ 'Montaigne et Villey de nouveau' (préface pour la nouvelle édition des *Essais*) (P. U. F., 2004) p. XVIII. この間の事情については、各訳本の「凡例」や「あとがき」に、概略的な解説が見られるが、本稿ではソーニエの序文の文章を借りて、要約してみた ([] 部分など、データについては一部補充したものもある)。前記、宮下訳『エッセー 1』の解説部分にも、詳しい紹介・解説、そして訳者としての立場の表明があることを、あわせてここに述べておこう。Cf. モンテーニュ (宮下訳)、前掲書、pp. 317-333. もちろん、講談社「人類の知的遺産」シリーズの一卷、荒木昭太郎著『モンテーニュ』(講談社、1985 年)にも、諸版の異同の歴史的概観が述べられている。最終的には、盲目の文献学者、ピエール・ヴィレーの博士論文に行き着くのだろうが、残念ながら筆者の手許になく、参照できない。P. Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, 2vols, Hachette, 1908/33.

ある。1595年版、上の第三段階が提示したものは、その編集者であるグルネー嬢の恣意性が疑われて、ボルドー市版ないしヴィレー・ソーニエ版では排除されている。まったく考慮しないわけではない、と言いつつも、モンテーニュが死ぬまで手許において書き加えていた本に基づき、最終的な『エッセー』を出版する、という方針を明記している。ヴィレーの1930年段階での覚書（note）では、「1595年版の不誠実^⑧」という表現も見られるほどである。

いずれにしろ、1580年の、1588年の、さらに最終段階のテキスト、という三種の異なるテキストを考慮に入れる必要があり、その最終段階のテキストは、グルネー嬢による1595年版ではない、という立場を明確にするのである。

2. モンテーニュのいわゆる「懐疑論」とは何か

さて、それでは以上のようなテキストの変遷、テキストの歴史を踏まえて、前稿でも主題的に触れていたモンテーニュの思想内容について、その懐疑論的側面に関して、論及したいと思う。彼の立場を懐疑論者として一括りにするにしろ、しないにしろ、そのターム、「懐疑論」という術語内容を検討しない限り、その判断は意味をなさないように思われる。従来型の懐疑論や、ピュロニズム的・極限的な懐疑論といった術語で、果たしてモンテーニュが何を語ろうとしていたのか、何を念頭に置いていたのか、明確にしない限り、彼が懐疑論者であったか否か、という設問自体が無意味であるからである。肯定で捉えるにしろ、否定で捉えるにしろ、結局同じ内容を見ていた、ということも十分にあり得る。前稿で見たように、メルロ＝ポンティの肯定、ヴィエイヤール＝パロンの否定^⑨、その判断は正反対であるが、その語るところにさほどの対立はない、と思われる^⑩。

ヴィエイヤール＝パロンにしても、否定の表現を節の「タイトル」として使用しているが、それはすぐに、独断的解釈としての「懐疑主義」の烙印を批判する、という文脈の中に出現しているだけである。つまり、「レーモン・スポンの弁護」の章、その「私は何を知っているか」だけを取り出して、一面的に懐疑論者としてモンテーニュを処理する愚を非難する件の中で、使用されている表現であって、端的に懐疑論者ではない、と語るものではない。ほとんどメルロ＝ポンティの主張と重なりつつ、その懐疑の根拠である、モンテーニュの自己の分析・記述の意義を語るための準備的表現でもある（「モンテーニュは懐疑論者ではない」）ことに留意しなければならない。ましてや、両義性をその哲学の正面に据えているメルロ＝ポンティについては、単純化そのものが誤解のもとである。というのも、懐疑論自体が両義

⑧ *Ibid.*, p. XXII. “infidélité de l’édition de 1595” とある。だからといって、そのデータをすべて考慮しない、というわけではないが……、という文脈の中で使用された表現。

⑨ 「モンテーニュは懐疑論者ではない」というのは、前稿で一部紹介した、ヴィエイヤール＝パロンの哲学史『フランス哲学』の中の、モンテーニュに関する章・第3節のタイトル。

⑩ 拙稿「17世紀から見たモンテーニュと今」（国際コミュニケーション学部紀要『言語と表現』第6号、2009年）

的に理解さるべきものだからであるし、さらに、その根拠をなす自我のあり方もまた、当然のことながら、両義的だからである。単純化はいずれにしろ危険であり、メルロ＝ポンティの見解にも、モンテーニュ的真理概念にも反するものであることを、まずはここに銘記しておこう。

それでは、その思想内容・思考過程について、モンテーニュの表現に即しつつ、思想的変化に即しつつ、じっくりと検討してゆきたい、と思う。部分的にして牛歩の歩みではあるが、それもまた、全体的真理、全面的真理を批判するモンテーニュ的思考スタイル^⑪には適合しているものと、幾分身勝手に得心しつつ論を進めたいと思う。

2-1. 『エッセー』第2巻12章（Ⅱ-12）の全体的構成について

まず、モンテーニュの懐疑論について検討するにあたり、その第一の出典というべき「レーモン・スボンの弁護」の章の全体的構成を見ておこう。『エッセー』中もっとも長大であり、かつどこまで、モンテーニュが自覚的に構成を考えたか、いささか疑問でもある章ではあるが、ここでは2004年出版の『エッセー』（QUADRIGE/PUF）の解説的文章を頼りに、その補遺（supplément）^⑫をも考慮しつつ、一応の構成・構造を確認しておこう。

まず、序論としてスボンの自然神学に関する記述、その二種の批判、つまり、信仰をもつ側からと合理主義者ないしは無信仰の者からの批判が続く。以上が序論であり、これは岩波文庫でもそのまま踏襲されている（以下の3章〔段〕構成と結論についても同様である）。

次いで本論が来る。Ⅰ. 人間の空しさ、Ⅱ. 人間の誇る知識〔学問〕の空しさ、Ⅲ. 知識〔学問〕の道具たる理性の空しさ、最後に「結論」が来る、という基本構成である。これは、岩波文庫の目次として、そのまま活用されているところであり、ヴィレー・ソーニエ版の各章冒頭に記載されている（2巻12章の）構成でもある^⑬。後者の記載ないし概説はさらに詳しく述べられており、最新版では、加えて、その補遺が作成されている、という次第である。

こうした大きな展開の結果、人間の弱さが徹底的に批判され、結論として、人間は、この世界においていかなる恒常的なものにも到達し得ず、永遠に変動する現象しか認識できない、こうした弱点をわずかに脱しうるのは、神の恩寵、キリスト教的信仰によって以外はあり得ない^⑭、と語られるのである。

こうした信仰の告白がどれほど誠実なものであったか、どれほど真情を告げるものであ

⑪ Cf. ヴィエイヤール＝バロン、前掲書、pp. 24-25. 「私には何事についても全体は見えない」（Montaigne, *op. cit.*, p. 302）という『エッセー』（I-50「デモクリトスとヘラクレイトスについて」）からの引用がある。むしろ、部分が全体を照らし出す、というモンテーニュ著『エッセー』のスタイル、いわば彼の哲学的スタンスが解説されている。

⑫ Montaigne, *op. cit.*, pp. 1347-1349. ヴィレー・ソーニエ版での各章冒頭の解説を踏まえて、この版の編者 M. Conche が、それをさらに詳しく分析・補足したものである。

⑬ *Ibid.*, p. 438.

⑭ *Ibid.*

たかはさておき、第2巻12章の基本的構成とその主旨については、以上のところで、概ね了解されるのではないと思われる。人間性を越えることにモンテーニュがどれほど期待していたかは、問題あるところであろう。

(a) 掌よりも大きくつかもうとし、腕の長さよりも広く腕をひろげ、脚の幅よりも広く跨ごうとするのは不可能であり、不自然だからである。人間が自分と、人間性を越えようとするのも同様である。人間は自分自身の目でしか見ることができないし、自分の手でしかつかむことができないからである^⑮。

こうした人間性の通常のレベル、自然状態を超えるのは、ただ神の恩寵、信仰による場合のみである、と語ってはいるものの、「人間性を越えること」を主題にしたものでは決してない。『エッセー』を忠実に読んでいく読者からすれば、モンテーニュのスタンスがどこにあるかは誤解のしようもない。この立場は、引用文の冒頭に見られる通り、A段階ですでに記述済みであり、C段階の追記でも「これ〔人間性を越えようとする〕はまた立派なことばかり、有益な願いである。だがやはりばかげている^⑯」と評されている。

2-2. モンテーニュのいわゆる懐疑論とは何か

それでは、本節（『エッセー』の第2巻12章）に見られる、モンテーニュのいわゆる懐疑論的内容について、つまりこうした構成の中で展開されている内包について、いさ少し論及しておこう。もちろん、懐疑主義を何と捉えるか、という点の重要さは論をまたないが、さらに、そうした懐疑論・懐疑主義によってモンテーニュの思想内容を説明すること、ある時期のモンテーニュの思想的到達段階を示そうとすることにも、問題があることは予め指摘しておこう。一個の哲学的主張、哲学的潮流で、一人の人間、モンテーニュのように複雑多岐な人間を説明すること自体の自己矛盾については、予め自覚しておくべきであろう。懐疑論を何と定義するにしろ、どのような言葉で限定するにしろ、そうした探求を通して、懐疑論・懐疑主義を媒介にして、モンテーニュの何が見えてくるのか、という点に、むしろ注目すべきであろう。さまざまな哲学的・思想的潮流について熟知するモンテーニュからすれば、その一つにとどまることなど問題にならない。そうした思想閲覧、思想遍歴を通して、諸思潮の哲学的バランスの中で生きていたのが、少なくとも晩年のモンテーニュの思想的人生の実相であったように思われるからである。ここでは、『エッセー』の第2巻12章、「レーモン・スボンの弁護」を通して表現された、いわゆるモンテーニュの懐疑論について見ておこう。

⑮ モンテーニュ『エッセー』（三、岩波文庫、1966年）p. 323；*Ibid.*, p. 604.

⑯ 同書、同頁；*Ibid.* 直前に引用されているセネカの願い〔ストア的願望〕を、やはり「ばかげている（absurde）」と否定する件である。

a) 前節でも述べた通り、この長大な弁明の章は、レーモン・スボンの神学を擁護すべく構想されている。その基本的枠組みもまた、そうした意図に沿ったものであることは確かである。まず、レーモン・スボンの自然神学、合理的精神から神を、信仰を受け止めようとするいわゆる自然神学について、父親の遺志にそって自身で仏訳もした自然神学の著者について^⑭、あるいは、その翻訳にいたった経緯について、簡略に説明することから章を起こしている。

当然のことながら、自然神学的なスボンの立場は批判に晒されることになるが、モンテーニュは、その批判を、二つの論点に整理している。信仰する側からの批判、つまり信仰にかかわることは理性では証明できない、という立場からの批判、さらにもう一つ、信仰しない側からの、つまり無神論者からの批判（それはまた、理性に重きを置く側からの批判、つまり合理主義者、理性主義者からの批判でもあるが）に整理して、提示している。

以上が、前節で述べた本章の構成の序論の、さらに導入部に当たる件である。以下、二つの批判的論点それぞれ、著者であり訳者でもあるモンテーニュによって概略的に反論されて後、3章〔節〕構成の本論へと繋げられる、という展開を見る。

第一の論点については、モンテーニュ自身一定程度同意する論点でもあるので、その反論はさほど激しいものではない。理性もまた神からの賜物であるのだから、その理性によって神を讃えることに何の不都合もない、という論拠が反論の基本線である。単に感情のみに、狂信のみに信仰を担わせてよいわけではない。ましてや宗教改革の時代、信仰をかけての宗教戦争という内乱状態のときの著作であるから、その種の配慮は十分に認められるところである。理性の思い上がりをただすべきは当然であるが、理性によって神を正しく讃えることも、それ自体自然な振る舞いである。ある種の狂信を牽制する意図を、ここに見ることは十分に可能であろう。理性をそれにふさわしい機能において活用すること、これは第二の論点に対する反駁の中心テーマともなるものである。もっとも、ここで言う理性についても、その内容については検討の余地があろう。それは学問的理性とは異なるものかもしれない、少なくとも、知性とは異なる意味の理性が、結論を先取りして言えば、いわば分別としての理性が、そこでも希求されているのである。これがまた、後のデカルトの理性、デカルトの分別を問うときに、再度検討すべき課題として浮上するであろう^⑮。

それがいかなる内容をなすにしろ、神からの賜物である理性をそれにふさわしく活用することに問題があるわけではない。その活用の仕方、その受け止め方こそが、問われるべきである。それがつまりは、第二の論点の反駁にリンクするわけであり、実はその議論の核心部分であった、ということであろう。

さて、その第二の論点であるが、それは、理性という武器を信仰の批判に使う誤謬にかかわるものとして、つまりは理性の思い上がり、逆上として、モンテーニュから徹底的な反論

⑭ 同書、p. 10; *Ibid.*, p. 440. 「われわれの知っていることはせいぜい、彼がスペイン人で約二百年前、トゥールーズで医術を開業していたということぐらいである」と述べている。

⑮ 塩川徹也『発見術としての学問——モンテーニュ、デカルト、パスカル』（岩波書店、2010年）参照。

を、執拗な批判を受けることになる。第一の論点との関係での反論はそこそこに、「そこで、今はただの人間を考察するとしよう^①」と語り出し、そうした論点の根源にある人間の態度に対する反論へとモンテーニュは移る。それが「思い上がり」(vanité)の批判であり、三段階の本論のメインテーマとなる。単に宗教にかかわる反論、反駁を遥かに離れ、人間の営みの根源に立ち返った反論、それがまた、学問的な営みをも巻き込み、さらには、学問・知識の基盤となる理性と感覚の空しさ・思い上がりの批判へと展開されることになるのである。

岩波文庫の表題部分で「空しさ」と訳されている vanité とは、もちろん「空しさ」の意味を本来的〔語源的〕にもつ単語〔←vanitas←vanus (vide)〕ではあるが、さらに「うぬぼれ、虚栄、見栄^②」という意味合いも派生している単語であることに、まずは留意しておくべきであろう。

b) さて、モンテーニュの展開を逐一紹介できるほどには、もはや紙数が残されていない。展開の核心部分、ピュロニズムについての思いを吐露している箇所を中心に、モンテーニュの懐疑論・懐疑主義に対するスタンスを確認して、今回の論考の課題に応じておこう。それは本論の第二段階、「人間の知識の空しさについて^③」と題されたところで、展開されるものである。

人間の「空しさ」から人間の「知識の空しさ」へと空しさの段階をせり上げた展開において、その知識を一般大衆のレベルで考察すれば、その空しさ、無意味さに通じていくのは、ある意味で不可避的でもある。そこで、その論の要請に応じて、知識の高みにおいて、学問の高みにおいて、果たしてわれわれの認識は空しいものかどうか、思い上がりであるかどうかを検討しよう、ということになる。そこで哲学の学派の中に、その課題を探求することになるのである。

まず、古来の哲学の流れを、モンテーニュは三つに整理する。つまり、哲学の本来の目的である「知識と真理の確実性を」1. 「見つけた人」、2. 「見つからない人」、3. 「まだ探している人」という三種の区分である。アリストテレスの逍遥学派、エピクロス派、ストア派などが第一の学派に属する、とモンテーニュは語る。「われわれの知識を確立し、これを確実なものとして扱った^④」からである。第二の学派〔見つからない人〕に相当するのが、アカデ

① 原二郎訳『エッセー』(三、岩波文庫、1966年) p. 30; *Ibid.*, p. 449. 引用文中「ただの人間」という、幾分曖昧な表現になっているのは、特別の恩寵状態にある場合を除く、ということ、つまり「自然な状態」にある「ただの人間」を考察し、それがいかなるものであるか、その思い上がりにふさわしいものであるかを検討しよう、というのが、ここでのモンテーニュの真意である。

② 小学館・ロベールの『仏和大辞典』(1988年)から。『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(第3版、旺文社)には「虚栄心、見栄、うぬぼれ、慢心」とある。

③ 「知識」と訳されているのは、ヴィレーの解説によれば、science のことであり、学問的認識も含めた意味での知識・認識であることを、まずは了解されたい。

④ モンテーニュ(原二郎訳)、前掲書、p. 123; *Ibid.*, p. 502.

メシア派である、とさらに語る。否定的にしる、それを断定しているからである。前者が独断論者であるとすれば、後者もそれに劣らず独断論者である、と見なすわけである。この二者に対し、いまだ真理は、知識は保持されていないが、その探求を続けている第三の学派が来る。これが、モンテーニュの理解するピュロンとピュロンの懐疑論者（ピュロニアン）、つまりピュロニズムの系統である。これは、「判断中止論者²³」というタームで指示されることもある。真理が存在するとも、存在しないとも主張せず、依然としてそれを探求し続けている一派のことである。これはモンテーニュ的な目からすれば、徹底した懐疑主義ということではあるが、他の二派との図式的区分によって表現すれば、1と2の学派の中間で絶え間なく浮遊する、揺れ動く一派、つまりは判断を最後まで回避する優柔不断な学派でもある、ということになろうか。

あるいは、先程の空しさやうぬぼれとの関係で語るならば、真理を断定することが独断論的立場であることは当然であるとしても、モンテーニュにとっては、その真理が見つからない、と否定的にしる断定するのは、前者と同じように独断的な立場の表明であることに変わらない²⁴。いずれにしる、知識の「うぬぼれ」を表明するもの、知っている以上を語ってしまう立場の「思い上がり」を共有している、というわけである。懐疑や無知を単純に、端的に主張する学派とも、このピュロンの徒は異なる、と彼は見なすのである。

こうしたいわば柔軟な懐疑主義的態度を、モンテーニュはその展開に応じて、「自由で独立²⁵」とも評している。学說的しがらみにとらわれず、自由に思考する態度、独立的に考え、知識の程度をあるがままに表現するスタイルを、モンテーニュは自由で独立のと捉えたわけである。「宙ぶらりんでいる方が、人間の迷妄から生まれたあんなにも多くの誤謬の中にまごついているよりも、ましではないか²⁶」と。

こうして、ピュロニズムの最終的な立場を彼は次のようにまとめあげる。

- (a) 彼らの決まり文句は *ἐπέχω*、すなわち、私は判断を保留する、私は動かない、ということである。これこそ彼らの繰り返し句であり、その他の句もすべて同じ内容のものである。その結果は、純粹で完全な判断中止ということになる。彼らが理性を用いるのは、探求し論議するためであって、決定し選択するためではない。常に無知を告白すること、いかなる場合にも賛否のいずれの側にも傾かない判断をもつこと、以上を想像すれば、ピュロニズムの何たるかを理解しえよう²⁷。

²³ 同書、同頁；*Ibid.* Epechistes とモンテーニュは表記している。エペコー〔私は判断を留保する〕、ないしエボケーする人々、とでも言うべきタームである。

²⁴ 同書、p. 125；*Ibid.*, p. 503. 参照。「もし相手が『自分はそれについて何も知らない』と断定すると、『君はそれについて知っている』と主張するであろう」と、ピュロニズム的反論の手法を解説している。

²⁵ 同書、p. 126；*Ibid.*, p. 504. 「判断力が十全なだけ、彼らはいっそう自由で独立である」と。

²⁶ 同書、同頁；*Ibid.*

²⁷ 同書、pp. 127-28；*Ibid.*, p. 505.

これはまた、パスカルの著作の中で照準を向けられた側面で言うならば²⁸、「自己自身をも揺さぶる極端な懐疑的態度」ということになるだろうか。「多くの学説から分離し」、「いろいろに疑惑と無知を表明した学説からさえも分離」している、とも語られるピュロニスムの極限的境界地である²⁹。

こうした、人間のあり方、知識のあり方、そして知識なり学問なりを支える感覚と理性、そうしたものの弱さの、空しさの徹底した指摘は、しかし、それ自体のために展開されたのではなく、懐疑論全盛の時代にあつてと同様、モンテーニュの生きた宗教的内乱状態の中でも実践的意義を担うもの、とモンテーニュ自身弁明していることは注目すべきことであろう。ストア派にしろ、エピクロス派にしろ、ヘレニズム期にあつて、単に禁欲的ディシプリンを説くだけの、快楽の勧めを説くだけのセクトであつたわけではない（そうした解釈自体が誤解であるが……）。そうした教説を介して、アパテイア（不受動）、ないしはアトラクシア（心の平静³⁰）にいたろうとする魂の叫びでもあつたわけである。これはモンテーニュの生きた時代でも、恐らく同様であつたろう。彼の早世した親友、ラ・ボエシーのプロテスタンツ的印象を消そうと、モンテーニュはしきりに氣遣っているし、また、本章の主題、自然神学的論法とその支えとしての懐疑論的論法（目的を遥かに飛び越えてそれを活用しているのではあるが）を、モンテーニュは、宗教的動乱の時代での、ぎりぎりの生き方の技術としても提示していたことは、注目に値する。それは例えば、次のような件に明確に表明されている。これは後のフランス国王アンリ4世の妻ともなる、マルグリット・ド・フランスに向けられた言葉である。

(a) 私はあなたのために、いつもの習慣に反して、わざわざこんなに長い文章を綴りましたが、あなたはご遠慮なく、毎日学んでおられる普通の論証の方法で、あなたのスボンの弁護をなさって下さい。そして、あなたの精神と学問を錬磨なさって下さい。と申しますのは、この最後に用いた剣法は、いよいよという時だけでなければ用いてはならぬものだからです。これは捨て身の一撃で、敵に武器を捨てさせようとするれば自分も捨てなければなりません。よくよくの場合でなければ、めったに使ってはならぬ秘法なのです。敵を殺そうとして自分まで死ぬのははなはだしい無謀と言わねばなりません³¹。

²⁸ もちろん、前稿でも触れたように『ド・サシ氏との対話』は、厳密にはパスカルの作品ではない。ここでは、その中の「全般的な普遍的懐疑」に対応する部分を取り出している。もっとも、この訳語に対応する表現は、「un doute universel et si général」（中央公論、1978年、p. 485；Hachette, p. 151）である。

²⁹ モンテーニュ、前掲書、p. 125；*Ibid.*, p. 503.

³⁰ 同書、p. 124；*Ibid.*, p. 503. 参照。文庫では、アトラクシアが「不動心」と訳されているが、「魂の平静」の方がアパテイアの訳語と混同されなくて、都合がいいかと思う。「不動心」と訳されると、どうしても「アパテイア」の方を連想してしまう。もちろん、「不動心」が誤訳だ、という意味ではない。

³¹ 同書、pp. 216-17；*Ibid.*, pp. 557-58. この部分の記述も、すでに1580年の初版からあるもの。

モンテーニュは、ここで、懐疑論的論法による信仰の弁明の仕方を、「捨て身の一撃」にも喩えている。敵を倒すとともに自分の身をも危うくするような、極限的な論法であると、この章を捧げたマルグリットに呼びかけている。さらに、そもそも人間の精神自体が、いわば「秘剣」のように、使い方を過つと、身を危うくする代物であることに注意を喚起している。

このように、モンテーニュにとって懐疑論的論法、ピュロニズム的その極限形態は、その生き方にも重なる、生き方を支える思考スタイルだったようである。懐疑論者であったか否かとは別に、こうした思考スタイルは、モンテーニュが生涯維持したスタイルであるように思われる。それは教説の内容を忠実に護持するのではなく、その精神を、その方法を十分に活かす、思想の継承の仕方と言えよう。

もちろん、デカルト的懐疑が、デカルト哲学自体に向けられうるように^{③②}、モンテーニュの著作内容についても、モンテーニュ的懐疑、あるいはピュロニズム的懐疑の手法が向けられねばならない、と語るべきかもしれない。本稿の展開はまだ、そこまで達してはいないが、今後の課題の一つとしてここに銘記しておこう。ある種、相対主義的思考法の中で心の平静を保つ^{③③}、というのが、モンテーニュの基本的テーマであったように思われるが、まだここでは、結論として提示できるほどに、リサーチも考察も進んではいない。ピュロニズムに対するモンテーニュのスタンスを、もう少し、テキストに即して分析する必要があるかと思うが、既に紙数も尽きており、今回はここで筆を擱きたい。

③② ダランベール『百科全書序論』（『世界の名著 29』中央公論社、1970 年）、p. 485。「彼は最後にはすべてを説明したと信じたとしても、少なくとも最初はすべてを疑うことから始めたのであるし、それにわれわれが彼と論争するために用いる武器は、いくらほこ先を彼の方に向けるからと言っても、やはり彼のものなのである」。ヴォルテールもまた、同趣旨のことを、彼の『哲学書簡』のなかの〈第十四信〉で、次のように述べている。「……彼は同時代の人たちに正しく推論することを、デカルト自身を攻撃するのに彼の創意になる武器の使用法を教えてやったのである。彼自身は良貨でもって支払いをしたと言えないにしろ、悪貨の評判を台なしにただけでも、大した手柄である」（同書、p. 145；Voltaire, *Lettres philosophiques*, Classiques Garnier, 1964, p. 76）と。デカルト哲学への反論もまた、デカルト自身の着想になる彼の「方法」〔就中、いわゆる方法的懐疑〕のもたらしたものの、とする理解では、二人とも共通している。

③③ Cf. ヴィレー『モンテーニュの《エッセー》』（木魂社、1985 年）/P. Villey, *Les Essais de Montaigne*, Nizet, 1932；あるいは、実証主義に基づく相対主義。「……相対的であってもなおしっかりとした認識の基礎が事実のなかにあることを、見て取ったのであった。かくして彼は、そこから、確固としていながら同時にきわめて柔軟な、一種の実証主義へと向かう。」（同書、pp. 85-86；*Ibid.*, p. 75）